

## 心と言葉の育ちを促す教師のかかわりについて

～絵本の読み聞かせの場面を通して～

杉山 砂寿・佐藤 輝子・佐藤 幸子

絵本の読み聞かせは、子どもが安心できる環境の中で、子どもと大人が同じ世界を共有し、心を通わせる心地よさを体感出来る活動である。また、登場人物に気持ちを重ねながら、喜び、驚き、不思議さ、悲しさ、くやしきなど様々な感情を読み取り、いろいろな形での表現の仕方を学び、生きた言葉の育ちにつながっていく。絵本のジャンルは多岐にわたり、扱い方も様々である。今回は、3歳児期の子どもの日常的な「泣く」という行為を、絵本を通して自分の気持ちと向き合う契機とした。また、4歳児初期の子どもの季節にまつわる経験を引き出しながら、様々な領域の活動を併せながら扱うことによる、心や言葉の育ちに言及した。

キー・ワード：人格形成の基礎 教師のかかわり 言葉の獲得とゆたかな表出 イメージの共有  
総合的な発達

### 1 はじめに

「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている」（教育要領解説より）幼児の人格形成の基礎作りにおいては、様々な場面、活動における教師の子どもへのかかわり方が大きな影響を与える。子どもからの情報の獲得や発信の意欲などは、信頼できる身近な人の存在や安心できる雰囲気などが大切であると考え。絵本の読み聞かせは読み手との心地よい関係や伝え合い、共感関係が成立しやすい活動の一つと考え、いくつかの場面について研究をすすめた。

### 2 研究目的

本研究では、絵本の読み聞かせの場面を通して、幼児の心や言葉が相互に関連しながら総合的に育っていく姿を検証していく。また、幼児の心や言葉の育ちのための絵本の選択のポイント、扱いの趣旨、教師のかかわり方などについて見ていきたい。

### 3 研究方法

本研究では、いくつかの絵本の読み聞かせの場面を取り上げる。そこでは、具体的な実践事例を挙げながら、扱いの趣旨、教師のかかわり、子どもの気持ちと言葉の育ちを対応させながら、考察を行う。

### 4 事例の考察

#### (1) 事例1（3歳児 2月）

絵本の題名「あーん あーん」

（福音館 せな けいこ）

#### ① 扱いの趣旨

3歳児期は、ちょっとしたきっかけで、泣きだしたり、付添の母親も扱いに困ったり、戸惑う場面が多く見られる。類似の内容が描かれている絵本を媒介に、子どもが自分の気持ちに自発的に気づき、表現しようとする契機となるよう扱った。

#### ② 教師のかかわりと子どもの様子

<前日の様子>

- ・一人の子どもが母親と別れてお弁当を食べることを嫌がり、ぐずぐずしたり、泣いたりした。

<教師のかかわり、絵本の扱い>

- ・子どもの気持ちを引き出すような絵本の提示の仕方、態度、表情などに配慮しながら言葉かけをする。
- ・泣いた時の気持ちに寄り添い、自由に表現出来るよう扱う。
- ・負の感情を十分認め、丁寧に取り上げる。
- ・共感的な態度、表情、動作、言葉などをかける。

<対象児の心と言葉の育ち>

- ・絵本をきっかけに、昨日、泣いたことを思い出し、

恥ずかしそうな表情をする。

- ・お弁当の袋をのぞき込むが、袋から出して食べられなかった様子を動作や言葉で表現する。
- ・母親を泣いて呼んでいる様子を動作や言葉で再現する。
- ・他児が優しくしてくれたことを話す。友だちの気持ちへの気づきが見られた。

＜他児の心と言葉の育ち＞

- ・内容に興味を示し、昨日の様子を思い出す。
- ・自分は泣かないで食べたことを動作や言葉で表したり、弁当の中身や食べた物を伝えたりする。
- ・普段の母親の態度や、母親とのかかわりの様子を思い出したり、表現したりする。
- ・対象児に「大丈夫？」と声かけをした事。
- ・自分の頑張りも伝えようとする。

子ども達の心の育ちを促すための教師のかかわりの意図を、短いいくつかの場面を抜き出し、やりとりの内容に対応させながら以下にまとめた。

Table 1 教師のかかわりの意図

教師	対象児Aと他児B,C	教師がとらえた子ども姿(*)とかわりの意図(◎)
帰ったらいやだよー ママーママー (って言ってるのは)だれかなー だれかなー	絵本をきっか けに、昨日泣い た場面を思い 出しているやり とり	*3歳児の姿。母親を求 める気持ちが強い。 ◎年齢相応の姿。母子の 活動から集団活動への 無理のない移行の為に、 機会を見つけて、話題に したい。
Bかな？  Bさ、ママあつ ちって言った よね。	B: ちがうよ。 Bは大丈夫。  B: 前はこうだった (母親を追い出す 動作をする)	◎子どもが自分で普段 の自分の様子を思い返 したり、自発的に話した りするきっかけを作る。
Aは、「ママー ママーおいで ー」って言うよ ね。Aはあまえ んぼう。	A: Aは、おいで ママおいで。  B: そうなっちゃう よ  C: Cは、おうちに	*普段は、頑固で自分の マイナスの行動を振り 返ったり、自発的に話し たりすることが苦手なA 児ではあるが、B児の発 言に誘われて自分から 昨日の行動を話そうと する。  *学校では見せない姿

Cは おうち でママおいで って言うよ。  B だけだよ。 「ママあつち」 って言うのは。 Aは「ママおい でーだよね。」	ママおいでって 言うよ。	を自分から話そうとす る。 ◎助詞の間違いはある が、話の流れを途切れさ せず、やりとりや内容に 重点をおきたかったた め、あえて聞かせるのみ で口声模倣は誘わない。  ◎B 児に対しては、どん な状態や気持ちでも認 められるという経験を 多くさせたいため、母親 に対する「あつちい け！」などの態度も、否 定的な言葉かけ、対応は しない。 ◎A 児に対しては、母親 に頼りたい気持ちを認 めつつ、B 児の様子に触 れることでA 児なりに考 え、気づききっかけにな るようにする。
昨日の昼食 時、恵方巻を 食べるのを嫌 がり母親を求 める場面を思 い出しているやり とり	A: Aは、早く！ 早く！ (ママ来てよ！)	◎昨日のA 児自身の行動 を細かく説明しようと する気持ちを肯定する。 振り返りの態度を育て る。  *話を逸らし、ごまかし ている。 ◎集団活動に入れず、お 弁当の袋に首を入れ、い じけていた様子等を、落 ち着いた気持ちで自由 に表現出来るように誘 う。
もじもじもじ もじ… 長いかな、短い かな。 恵方巻は長い かなー？短い かなー？	A: (恵方巻は) 長いかな  A: 長いかなーだっ け	
B ちゃん、心配 してた？ A おいでーっ て言った？  「A 大丈夫」っ て言ったの  C ちゃん。優し い。 C ちゃんパチ ン(両手でハイ タッチ)	A 児が泣いてい た場面を思い 出しているやり とり  A: 大丈夫だよ (とってくれた。)  C: 言った  C: (ハイタッチ)	◎A 児の行動に対して気 にかけていた子 (B 児) がいたので、話題とし てとりあげる。自分がぐ ずっている時に、B 児が「大 丈夫だよ」と言ってく れたことを覚えていたこ とを取り上げる。  ◎励ました子に対しても、 気持ちを認め、ほめる。

	B: Bも言った。	◎真似して言った子の気持ちも肯定する
--	-----------	--------------------

③ 考察

年少時期は、自分の気持ちをきちんと相手に伝えるための表現が未熟であり、「泣く」「叩く」「物を投げる」などという行為で気持ちを表そうとする。この様な状況における教師のかかわりで大切な事は、不快な感情、悲しさ、くやしき、不安感、欲求などの様々な表現の仕方や、好ましい行動のモデルを多く示してみせることである。つまり、行動の是非ではなく、様々な感情や行動の自発的な振り返りや表出が出来るようになる事が、心と言葉を育てる契機になることが分かった。他児にとっても、泣いた子どもを励ましたり、自分の経験を思い出したりするなど、心や言葉の成長が見られた。

(2) 事例2 (4歳児 6月)

絵本の題名「あめふりくまのこ」

(チャイルド 鶴見正夫、高見八重子)

① 扱いの趣旨

6月は雨の多い季節である。子どもたちの気づきや興味も、雨にまつわること、草花や生き物の内容が日々多く見られた。水たまりや雨に濡れた話、傘や長靴や雨具の話、かたつむりやかえるやあじさいの話などである。教師は、日々の様々な場面や活動を通して、これらを関連づけて扱ったり、広げたりしてきた。壁面の構成も、子どもたちと制作活動をしたり、子どもの発信からその都度話題に取り上げたりしてきた。(Fig.1) 本事例では、日々の活動の流れの一環として、「あめふりくまのこ」の絵本を提示し、くまのこの心情や雨ふりの様子を細やかに扱った。



Fig.1 壁面の構成 (雨、傘、あじさい、かたつむり)

② 教師のかかわりと子どもの様子

<教師のかかわり、絵本の扱い>

- ・絵や歌詞に表される情景、くまのこの心情などを丁寧に読みすすめる。
- ・絵本の理解が深まるよう、動作化させたり、教材を工夫したりするなど、細やかな扱いを心がける。(Fig.2)(Fig.3)
- ・絵本の読み聞かせをきっかけに、様々な自発的な気づきや広がりをもてるよう、前後の活動や環境設定にも配慮する。



Fig.2 動作化 手で水をすくって飲む



Fig.3 使用した教材

<子どものイメージの育ち、内容の理解と表現>

- ・傘のイメージをゆたかにもちながら、大きな葉っぱを頭にのせる事を楽しめた。(Fig.4)(Fig.5)
- ・雨粒が葉におちる様子を全員が表情や動作で表現し、雨粒の冷たさのイメージを共有出来た。
- ・小川にかけよる、そうっとのぞく、小川の冷たさを感じながら水を手ですくう、飲むなど身体での表現を楽しみ、歌詞を深く理解出来た。
- ・絵本の流れを理解しながら歌遊びが楽しめた。



Fig.4 イメージした葉っぱを作る様子



Fig.5 くまの子になり葉っぱを乗せる様子

#### <心と言葉の育ち>

- ・雨粒の感触や雨の強弱を「ちょっと、冷たい」「ぼつぼつ 降ってる」などと伝えようとした。
- ・最後に母親に会えたくまのこの心情に共感し、「ママに、会えたね」「よかったね」など、嬉しい様子や、ほっとした様子を表現した。(Fig.6)
- ・小川が出来る様子を想起、再現しながら、砂遊びを楽しむ姿が見られた。
- ・驚きや不思議さを「山が高いね」「雨がどんどん降るね」「わあ、川ができた」「くまのこがかけきたよ」など、声や言葉で表現しようとした。



Fig.6 くまの子の心情を言葉で表現する様子

### ③ 考察

「幼児期は諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである」(教育要領解説)とある。

この事例は、事例前後の様々な活動の流れの一部として組み込まれたものである。子どもは五感を通した総合的な経験を通して様々な事柄に興味や関心を持ち始める。そして、このような心の育ちがベースとなって、自発的な言葉の獲得や感情を伴ったイメージゆたかな表出につながる。

言葉の獲得には、話の流れや情景をイメージしようとする力、意味をきちんと分かってもらう力などが大切である。また、ゆたかな表出には五感や感情が伴った言語表現が出来ることが大切である。

事例では、雨粒の冷たさを五感を伴ってイメージ出来たり、川に向かうくまのこの気持ちを身体や言葉で楽しみながら表そうとしたりする子どもの姿が浮かび上がった。心と言葉が相互に関連して育てられるものであることがみられる事例となった。

### 5 まとめ

絵本の読み聞かせにおいては、絵本の選択、扱い方、イメージの持たせ方、理解や表現の促し方など、多岐にわたっての配慮が必要である。

教師は絵本で何かを一方的に教え込むのではなく、教師や子ども同士で自由にイメージし合う事、分かり合う事、伝え合う事、共感し合う事を大事にして読み聞かせをしなければならない。その際、教師には読み手としての雰囲気、表情、子どもへの眼差し、声のトーン、強弱など、細やかな配慮が求められる。また、個々の子どもに合った教材の準備や扱い方、かかわり方の工夫が大事である。

#### 【参考文献】

幼稚園教育要領解説 文部科学省 H30・3月

#### 【付記】

本研究は、筑波大学聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の審査を受けて承認を得ている。